

小田 泰子 著

『種痘法に見る医の倫理』

WHOが全世界天然痘根絶宣言を行ってより、遂に二十年が経過しようとしている。この画期的な偉業を記念して日本医学会は、一九八三年の第二十一回総会（於大阪）において「天然痘ゼロへの道——ジェンナーより未来のワクチンへ」という特別展を開き、同名の冊子も出版した。そこには道すじとしての「ジェンナー以前の天然痘予防」即ち人痘種痘法が書かれている。三頁分あるが挿画を抜くと一頁半である。もう少し新しい本、川村純一氏著の『病いの克服——日本痘瘡史』をひもどくと、人痘種痘については種痘の章の約十二分の一、七頁に満たない分量である。

すでに忘れ去られようとしているこの人痘種痘に焦点をしばり研究された成果が、ここにご紹介する『種痘法に見る医の倫理』である。標題に倫理がつくとちよつと足ぶみしたくなるのであるが、まず目次から入ろう。

推薦のことば、序章・天然痘はいま、第一章・天然痘と十八世紀の医学、第二章・イギリスにおける人痘法、第三章・新大陸ボストンにおける人痘法、第四章・医師による人痘法反対論、第五章・人痘法と医療統計の誕生、第六章・フランスにおける人痘法、第七章・中国における人痘法、第八章・日本における人痘法、終章・医の倫理はいま、となつてゐる。ごろんの如く二一八頁のうち二百頁以上が、世界的に行なわ

れた人痘接種法の歴史でうずまわっている。そういう点で貴重な文献になるだろうと考えられる。

著者は眼科の開業医で開業後二十六年にして東北大学大学院国際文化研究科に入学され、見事一九九八年に国際文化博士第一号となられた。その折の論文「人痘法受け入れ論争の歴史的意義の再検討——文化ならびに思想の歴史に照らして——」をふくらませてこの著作ができたようである。本誌には第四四巻第三号（平成十年）から三回にわたつて「アメリカにおける人痘接種法——一七三一年からアメリカ独立まで——」と題した論文が収載されている。この論文に物足りなさを感じる方は、ぜひこの著作をこ一読いたゞきたい。

巻末には年表と人名索引がのせてあるが、後者はその人物の生きた時代まで記した親切な索引となつてゐる。

標題にある「医の倫理」については、紙上論争、公聴会等々の紹介の中で断片的に出てくるが、バイオエシックスの立場としての煮つめ方にもう一工夫があるのであるまいか。

（中西 淳朗）

〔東北大学出版会 仙台市青葉区片平二一—一、電話〇三二—二一四—二七七七、平成十一年十一月二十七日、A5判、二一八頁、本体二、五〇〇円〕